

田中秀介展 Shusuke Tanaka: "Painted"
Natural History Museum

絵をくぐる

大阪市立自然史博物館

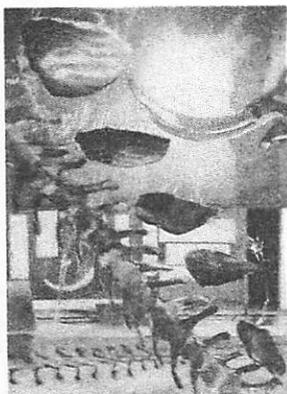
[主催] 大阪市立自然史博物館

[助成] 文化庁「ARTS for the future! 2」補助対象事業

[会場] 大阪市立自然史博物館 本館1階 第2展示室

[会期] 2022年10月25日(火)～12月11日(日)

- 展示室入口から時計回りに作品情報(タイトル、制作年、素材・技法、サイズ)を掲載しています。
- 作品はすべて作家蔵です。
- 作者の田中秀介さんによる作品についてのコメントを上段に、当館の田中嘉寛学芸員による描かれた資料についての解説を下段に記しています。
- 展示室の写真撮影、SNSへのアップはOKです。ぜひ以下のハッシュタグをつけて投稿してください。
#田中秀介展 #大阪市立自然史博物館 #絵をくぐる



一端のせめぎ合い
2022
油彩、キャンバス
259×194 cm

一つのものを目で追うと、違うものが目に入る。解るように示されたものが幾重に重なり合い、それが何であったか解らなくなる。そもそも私は何も知らなかった。知る以前、知る以後、その間であたふたする。

ステゴサウルスから、新生代の展示

手前に描かれているのは、ステゴサウルスの尻尾です。ステゴサウルスは中生代ジュラ紀に生きていた植物食の恐竜で、全長9メートルありました。尻尾は背骨があつまってできていて、ふるとしなやかに、体のよこまで曲げることができたと考えられています。背中から尻尾にかけて、三角形やダイヤ形の板が並んでいます。板の内部や側面には血管のあとがのこされていて、放熱板として使われていたと考えられています。

ステゴサウルスの奥には、ヤベオオツノジカ、マチカネワニそして氷河時代の展示がみえます。



威勢寸借

2022

油彩、キャンバス

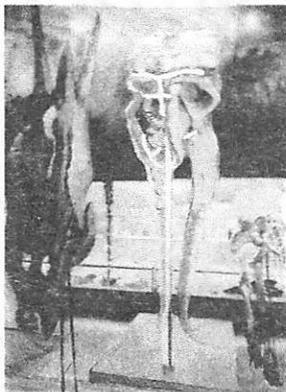
259×194 cm

威勢よく生きたいものだが、中々上手くいかないことも多く、威勢を保つのは難しい。彼は威勢が良い。しかし、たまたま。それで良い時もある。私も疲れたら、どえらいもの前に立ってうわべだけでも威勢を保とう。

ザトウクジラの前肢、それからカツオクジラ

中央の大きなものが肩の骨、肩甲骨で、大阪市平野町からみつかったおよそ2000～5000年前のザトウクジラです。ザトウクジラは体長の1/3にもなる巨大なウデを持っています。イルカもクジラも尾ビレをつかって泳ぎますが、ザトウクジラはウデも使って泳ぐ珍しいクジラです。

作品中の人物の左肩のあたりにある化石は、大阪市の今里で見つかった、世界初にして唯一のカツオクジラの化石で貴重な標本です。手前のケースには、縄文時代の貝類が並んでいます。



取り持って一体

2022

油彩、キャンバス

259×194 cm

支える方は、支持するものの形に寄り添い、補完する。支持するものが無くなっても、その形を保ちながら自立し続けるだろう。

コウガゾウのウラガワ

これはキバだけで3メートルもある大きなコウガゾウの頭で、前後長さは7メートルあったでしょう。他のゾウのキバと違って、滑り台のように前下方にまっすぐ伸びています。展示を後ろからみると、特注の白いフレームがピッタリと下アゴと頭に固定されていることがわかります。

絵の左側は正面からみたトリケラトプスで、左右につぶれて化石になりました。名前の由来になった3本(トリ)のツノ(ケラス)が描かれています。



一端の星

2022

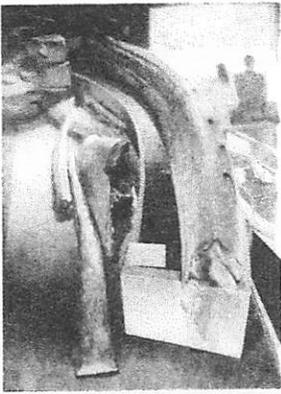
油彩、キャンバス

259×194 cm

私が住むここは星で、となると見渡すもの全てが星の一端。この石も同じく星の一端を担うが、その中にさらに星を見出す。ともすると夜空は石の表面。

火山岩

大阪と奈良にまたがる二上山から採集した火山岩です。二上山はおよそ1000数百万年前に生まれ、繰り返しておこった火山活動によって成長しました。描かれたのは、一部を切り取り磨いた火山岩で、さわれる展示になっています。断面には、火山灰や軽石、火山ガス、岩片などが混じり合っている様子がみえます。



二人の渚

2022

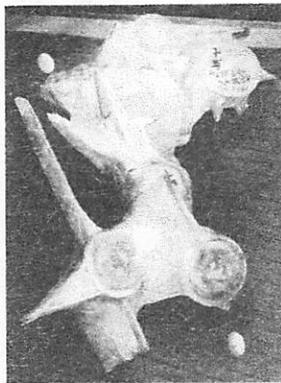
油彩、キャンバス

259×194 cm

仲睦まじい二人、見ていて和む。博物館デートですか。良いじゃないですか。この後何か良いものを食べに行ったりするんですか。ああ、私はもっと和みたい。そこの固い骨群を懸命に渚と見立て、二人を見続ける。

ナガスクジラの左下アゴ

大阪市の城東区の地下4から5メートルの深さからみつかった、縄文時代の巨大なナガスクジラの下アゴで、4.4メートルもあります。上にあいている穴は、神経がでていた穴で、このクジラも「生きていた」ことを思わせます。左奥に積み上げた背骨も、同じく縄文時代のクジラです。当時の大阪平野には、河内湾という海が入り込んでいて、クジラ以外にも貝など海の生き物の化石が見つかります。



私、結構色んなものに記してきたのですが、化石には未だ記した事がない。化石だろうと当然インクは乗るが、記して良いよと言われても躊躇する。思い切って晩飯に必要な具材などを記して、化石片手にスーパーに出向きたい。

埋もれているイルカの背骨

1954年に発見された古い標本で、縄文時代の地層である難波累層という地層から母岩ごと収集されました。イルカの背骨も母岩に少し包まれています。よくみると母岩には貝殻やウニの破片も含まれていて、当時の海を想像させてくれます。イルカの背骨のうえに、黒墨で産地情報として「梅田」と書かれています。朱墨のQ4822は当館の標本番号です。背骨は前後に薄いので、高速で長距離を泳げるタイプのイルカの背骨でしょう。

筆記体

2022

油彩、キャンバス

259×194 cm

身を収められそうな空間があれば、そらくぐりたくなる。この展示室はその様な空間まみれである。しかし、そんなことをしてはいけない。一つお気に入りの入り口を描いて、思いとどまる。

アケボノゾウの体

アケボノゾウは200万から100万年前に北海道などをのぞく日本列島にすんでいた、肩の高さまで2メートルない小型のゾウです。当館の学芸員だった樽野博幸氏が三重や瀬戸内のゾウ化石を参考に組立てた、世界初のアケボノゾウの骨格復元です。化石は通常、バラバラになって、そうとう破損しますが、この標本はかなりそろって見つかった貴重なものです。肩の骨(肩甲骨)が黒いのは、化石が見つかっていないのでスタイロフォームで作ったためです。

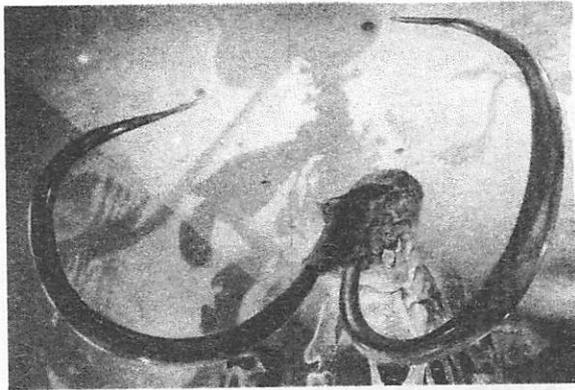


やぐら

2022

油彩、キャンバス

259×194 cm



せり出す異様と拠り所

2022

油彩、キャンバス

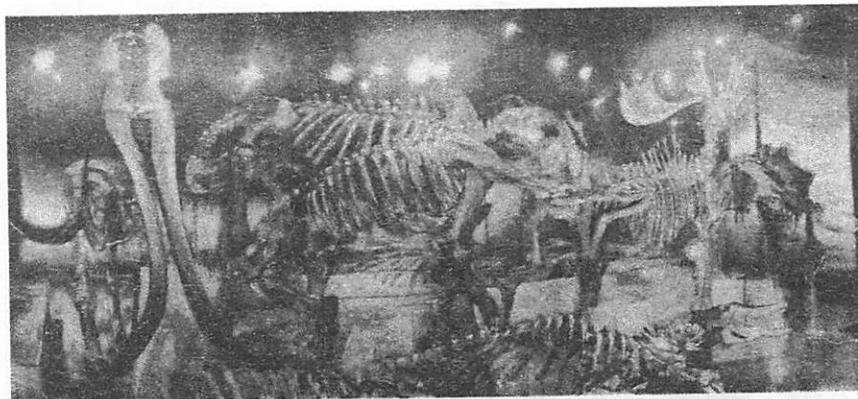
259×388 cm

仰々しく天井に映し出された影。影があればその実体が気になる。影の出自を探すがよくわからない。そうしている間に手前のツノが気になる。いや、ツノが先に気になっていた筈だ。もう、どちらでも良い。

ケナガマンモス

日本では北海道にすんでいたゾウの仲間で、2万年前に絶滅しました。長いキバは第二切歯、つまり前歯です。キバは骨ではなく、エナメル質なので、展示でも質感の違いを表現しています。キバの間にある大きな穴は、昔は一目巨人キュプロクスの「目」などと思われていたこともありますが、実際には鼻の孔です。

右上の天井には、ヤベオオツノジカの特徴的なツノがカゲとして見えます。



これまでをこれからの果てへ

2022

油彩、キャンバス

259×582 cm

化石が形成され、人がそれを発見し、あらゆる知恵と技術を駆使し、現在の様に展示されている。積み重なった途方もない時間の先に私は立ち会っている。私は恐らく化石にはならないが、化石は引き続き化石としてこれからもあり続けて欲しい。

新生代のほ乳類とマチカネワニ

左からアケボノゾウ、コウガゾウ、奥がアメリカンマストドン、手前の二足立ちがオオナマケモノ、ヤベオオツノジカ、一番右がナウマンゾウ、そして一番手前がマチカネワニです。恐竜の時代である中生代が終わったあとの「新生代」を代表する人気古生物のコーナーです。ゾウが多いのは、樽野学芸員の専門が反映しているのだと思います。学芸員の専門性や特色が、展示に反映されていくことで、標本には付加価値がつくので、より生き活きとした展示になるのでしょうか。

2. 企画展

「いきもののかたち “ピュフェの自然誌博物館”」

2023年7月15日(土) - 10月1日(日)

当企画展は、ふじのくに地球環境史ミュージアム（以下ふじみュー）との共催で、ふじみュー所蔵の実物標本と、ピュフェの描いた生きものをあわせて展示する試みである。（図1）

ピュフェは、子どもの頃から博物館や図鑑が好きで、夏休みを過ごした海辺では貝や蟹などにふれて遊び、美術館でも絵の中のうさぎやめんどりに見とれていったという。少年時代にピュフェが採集してつくったという、昆虫の標本箱の写真も残っている。約50年に及んだ画家人生においても、生きものをモチーフにした作品を繰り返し描いた。ピュフェは毎年テーマを決めて個展を開催していたが、1964年の個展のテーマは「ピュフェの博物館」で、昆虫をはじめとするさまざまな生きものを描き、蝶やくわがたの彫刻作品もつくっている。

ピュフェの描く生きものは、決して「写真のように本物そっくり」ではない。ピュフェが美しい、おもしろいと感じたところを、ピュフェのスタイルで誇張して描いている。触覚や脚が長かったり、それらが不思議な場所から生えていたり、本物と比べるとちょっと変だなと思うところもあるが、絵としてバランスよくおさまっている。そして、生きものたちは生きた姿ではなく、台座にのった剥製として描かれているものも多く、カンヴァスいっぱいに大きく描かれた虫は、まるで標本をピンでとめたようでもある。ピュフェが生きものの生き生きしたようすよりは、「かたち」に興味があったのではないかとと思われる所以である。こんな風に生きものを描いた人は他にいたのだろうか？これもまた「ピュフェ・スタイル」である。実物の標本とピュフェの絵をならべて展示することで、ピュフェが魅力を感じた「いきもののかたち」がみえてくるのではないかと、そしてそれをピュフェが絵としてどうあらわしたかったのかが明らか

かになるのではないかと、というのが、今回の展示のねらいであった。

ピュフェの描いた生きものは、この種類がモデルだ、とはっきりといえるものばかりではない。ピュフェは自分が見知っている生きものに空想を加えて描いているので、絵とモデルの生物は一对一の関係でもない。とはいえ、生きもの専門家がピュフェの絵を見ると、色やかたちから「この種類を描いたのではないかと想像するものはある。例えば、ピュフェの《赤い昆虫》のかたちは、オスの長い前脚が特徴の南米産の「テナガカミキリ」を思わせる。テナガカミキリはその模様から、英語では「道化師のカミキリムシ」と呼ばれるというから、ピュフェをたくさん描いたピュフェにはぴったりのようにも思えてくる。よく見ると、ピュフェの絵では触角や前脚のつきかたが実際の虫とは違っているが、ピュフェが長さを思いきり強調して描いているせいか、不思議と絵の中では違和感がない。（図2）

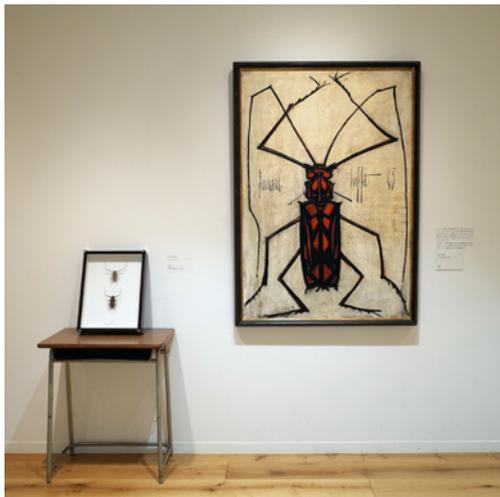
また、ふじみューの昆虫担当の研究員によれば、《ハチ》という作品にはハエのなかまの特徴があるという。ハチには前後2対、4枚の翅があるが、ハエのなかまでは前の翅だけが飛ぶために使われ、後ろの2枚は小さな突起のようなかたちになる（これを「平均棍」という）。ピュフェの《ハチ》にはこの突起が描かれているのだ。ガガンボを描



（図1）ピュフェの描いた鳥と鳥の標本が並ぶコーナー

いたと思われる《褐色の昆虫》にも、この突起が描かれているが、実際ガガンボには平均棍があり、それは展示した標本でも確認することができる。ピュフェは昆虫のからだの、こうしたパーツを知っていて描いたのだろう。そして、それを《ハチ》にも描いてしまうほど、お気に入りのパーツだったのかもしれない。博物館や図鑑で昆虫のからだを眺めて楽しむピュフェの姿が思い浮かぶのである。（図3）

ピュフェはさまざまな色やかたちの蝶の絵をたくさん描いた。我々学芸員は、ピュフェが想像たっぷりに好きなかたちを描いたのだろうと思っていたが、蝶の標本を展示してみて、ピュフェの絵にあるような、いろいろなかたちの蝶がいることを知ることとなった。こんなにいろいろ



(図2)《赤い昆虫》とテナガカミキリ



(図4) 新館落成の記念にビュフェが描いた蝶の屏風を中心に蝶の作品を集めた展示室

ろなかたちの蝶がいるのかと、生きものに対する新しい発見をビュフェと共有したような気持ちにもなる。(図4、図5) 展示する標本を選定したふじみューの研究者(昆虫担当)が、標本搬入の際に「ビュフェさんに見せたい標本持ってきました!」と言ったのも、生きもの好き同士が時空を超えて対話しているように感じられた。

ビュフェの絵と標本をいったりきたりして比べながら見ていくことで、「ここをこんな風に描いたんだな」「こんな生きものがいるのか」と、「絵」にも「生きもの」にも発見が見つづく。トンボの目のところを塗り残してキャンパスの布目が見えるのも、もしかして複眼を表現しようとしたのだろうか、と想像してしまう。別のトンボの絵を見ると、筆の線で複眼を表現しようとしているようにも見え、ビュフェはいろいろな方法を試していたのだらうとも思う。ビュフェの生きものを見る観察力と、作品をつくりだす創造力を楽しむ展覧会となった。(図6)



(図5) 蝶を集めた展示室にはさまざまなかたちの蝶の標本が並ぶ



(図3)《褐色の昆虫》1対の翅の後ろに小さな突起のようなかたちの「平均棍」が描かれている

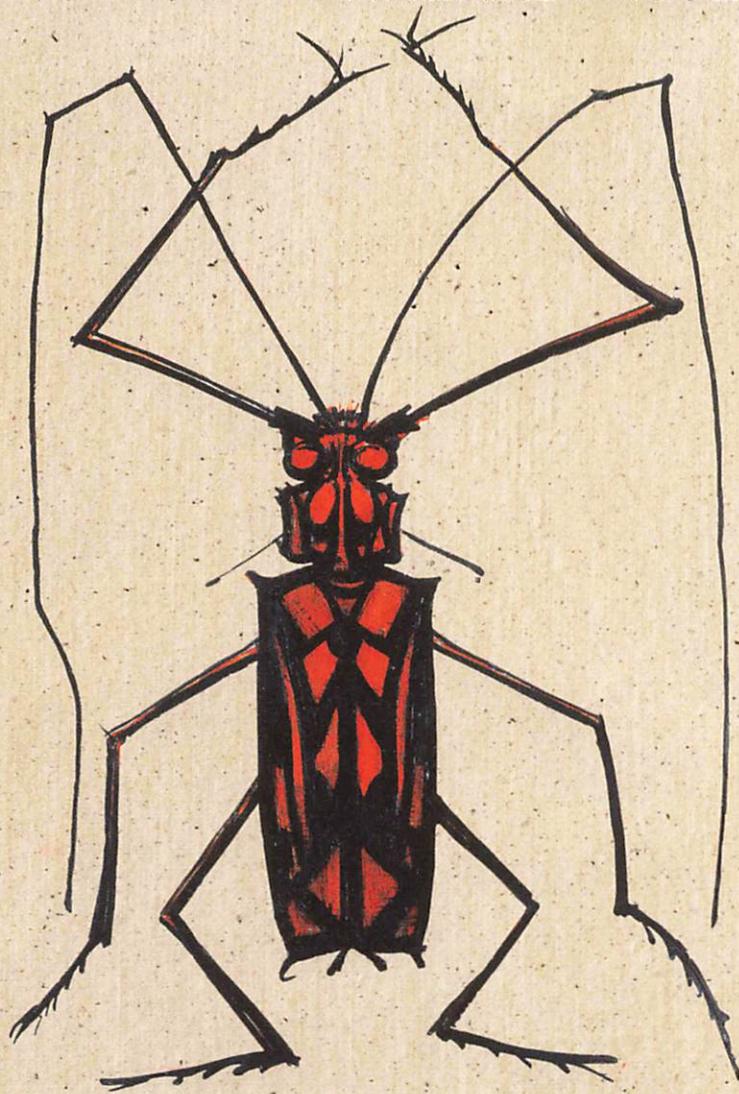


(図6) 海の生きものコーナー。標本を観察してから、絵を描いてみるワークショップも実施。

ベルナール・ビュフェ

いきものの

かたち



《赤い昆虫》1963年 油彩

おとなも子どもも
楽しもう!

ビュフェの“自然誌博物館”



ゴライアストリパネアゲハ 標本 (ふじのくに地球環境史ミュージアム蔵)



《蝶》1963年 油彩

2023年7月15日(土) — 10月1日(日)

主催・会場：ベルナール・ビュフェ美術館 共催：ふじのくに地球環境史ミュージアム

後援：静岡県教育委員会、長泉町教育委員会、清水町教育委員会、裾野市教育委員会、沼津市教育委員会、三島市・三島市教育委員会、静岡新聞社・静岡放送

【所在地】 〒411-0931 静岡県長泉町東野クレマチスの丘515-57 TEL 055-986-1300 FAX 055-987-5511

【入館料】 大人：1,200円(1,000円) 高・大学生：600円(500円) 中学生以下：無料 ()内は20名様以上の団体割引料金
同時開催中の“ビュフェ・スタイル”とは何か?展もご覧いただけます

【休館日】 水曜日・木曜日 【開館時間】 10:00-17:00 入館は閉館の30分前まで 【公式サイト】 www.buffet-museum.jp

ビュフェの目と手を通して生まれた虫、鳥、さまざまな生きものの魅力。

虫が大好きな少年だったベルナール・ビュフェ。博物館や図鑑が好きで、夏休みを過ごした海辺では貝や蟹などにふれて遊び、美術館でも絵の中のうさぎやめんどりに見とれていました。さまざまな生きもののかたちの魅力とそれを絵に表現することの楽しさは、幼いビュフェの心にしっかりと焼きつけられたのでしょう。その後、ビュフェはさまざまな生きものを描き続けました。ビュフェの描く生きものたちは、写真のように本物そっくり、ではありません。それぞれの生きもののかたちの美しさ、おもしろさを、ビュフェのスタイルで誇張し、空想もまじえて描いたのです。ビュフェ少年が好きだったトンボやチョウをはじめ、画家の愛したさまざまな「いきもののかたち」をお楽しみください。

標本画像はすべてふじのくに地球環境史ミュージアム提供



ベルナール・ビュフェの標本箱 (写真資料)

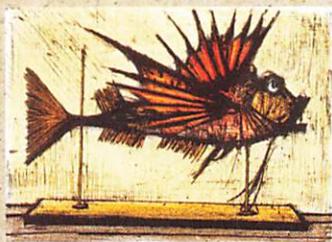


トゲノコギリガザミ

《蟹》1963年油彩



《小さいミミズク》1963年油彩



《かさご》1964年リトグラフ



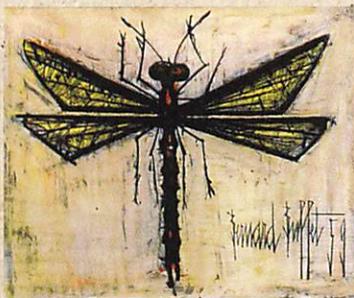
ゴライアストリバネアゲハ



《ガマ》1964年油彩



オオコノハズク



《とんぼ》1959年油彩



ウマの頭骨



オニヤンマ



《馬の顎》1970年油彩

ふじのくに地球環境史ミュージアムから標本たちがやってくる！

ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵の生きものたちの実物標本を、ビュフェの作品とともに展示します。生きもののかたちをじっくり観察したり、ビュフェがどんなところに魅力を感じて描いたのか見直してみたり、絵にも生きものにも、きっと新しい発見があります！



ふじのくに地球環境史ミュージアムは、静岡市駿河区大谷にある県立の自然系博物館で、静岡県の自然に関する標本等を多数展示しています。ミュージアムは「100年後の静岡が豊かであるために」を活動テーマに、人と自然が共生する未来のあり方を考えていきます。

おとなも子どもも見て描いてみるワークショップ
『生きものをじっくり観察×描いてみよう!』

展示室の標本をじっくりと観察、スケッチしてから、生きものの絵を描いてみましょう!

開催日: 7月22日(土)・8月6日(日)

時間: 13:30~15:30

定員: 6組(1組は付添の方を含めて4名まで)

5才以上どなたでも/大人も歓迎。1か月前より申込受付

参加費: 描く方ひとりにつき500円

『ビュフェの生きものツアー』14:00から30分間程度
予約不要

開催日: 7/23日・8/5日・8/20日・9/9日

当館学芸員がビュフェの生きもののかたちの絵のみどころを紹介します。

くわしい内容やその他のイベントはウェブサイトで。

ベルナール・ビュフェ美術館 www.buffet-museum.jp

【所在地】 〒411-0931 静岡県長泉町東野クレマチスの丘515-57 TEL 055-986-1300 FAX 055-987-5511

【入館料】 大人: 1,200円(1,000円) 高・大学生: 600円(500円) 中学生以下: 無料 ()内は20名以上の団体割引料金
同時開催中の「ビュフェ・スタイル」とは何か?」展もご覧いただけます

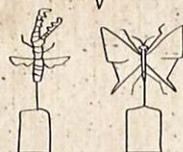
【休館日】 水曜日・木曜日 【開館時間】 10:00-17:00 入館は閉館の30分前まで

【アクセス】 自動車の場合 新東名・長泉沼津I.C. または東名・沼津I.C. →伊豆縦貫道(東駿河湾環状道路) →長泉I.C. 出口
→R246を右折/「城山」交差点左折/静岡がんセンター方面へ(新東名長泉沼津I.C.より約5km)

電車の場合 JR東海道線[三島駅]下車 南口より富士急シティバス駿河平方面行

(運行本数に限りがあります。詳細は当館ウェブサイトをご覧ください)

ビュフェの虫の彫刻もあるよ!



2024年12月14日

令和5年度「Innovate MUSEUM 事業」 自然史博物館×美術館の連携と STEAM 教育研究会

「見る」ことからつながる美術館と自然史博物館のプログラム

姫路市立美術館 鬼本佳代子
福岡市美術館 崎田明香

- 1) 福岡市美術館と北九州市立美術館を結ぶアートな遠足
美術館といってもそれぞれ違う
収蔵品だけではない資源（リソース）の開拓
- 2) 植物のかたち
美術館学芸員が見る植物、自然史博物館学芸員が見る美術作品
- 3) いきヨウヨウ講座「私の桜、私の梅」
美術作品の多様な見方を参加者と共有する
- 4) 美術館で Zoo
福岡市動物園と福岡市美術館のコラボレーション
飼育員と学芸員の人的交流から生まれたもの
- 5) 福岡市美術館と油山市民の森で『思いの種』をつくろう！
造形作家の小林重予が考案した植物の種を題材にしたワークショップを、
油山市民の森と福岡市美術館で、内容を再構成し実施
- 6) まとめ

【参考まで】

- ① 花田伸一、鬼本佳代子『2004年 福岡市・北九州市連携事業 芸術・文化交流企画 福岡市美術館と北九州市立美術館を結ぶアートな遠足記録集』（福岡市美術館、2005年）
- ② 神保明香「美術館と動物園の連携：「美術館で Zoo」の教育普及活動」『福岡市美術館紀要 2号』（福岡市美術館、2014年）pp.1-12
- ③ 錦織亮介「福岡市美術館所蔵 狩野探幽《獺図》再考」『福岡市美術館紀要 9号』（福岡市美術館、2021年）pp.9-18
- ④ 鬼本佳代子「福岡市美術館における高齢者対象プログラムについて～内容・意義・課題～」『福岡市美術館紀要 9号』（福岡市美術館、2021年）pp.19-27

②以降は福岡市美術館のホームページからダウンロードできます。福岡市美術館のブログも見てください。

福岡市美術館紀要：<https://www.fukuoka-art-museum.jp/publications/?cat=bulletin>

福岡市美術館ブログ：<https://www.fukuoka-art-museum.jp/blog/>

小規模自治体の自然史、天文、美術系ミュージアム連携事業（面河山岳博物館）,参考資料

表、久万高原ミュージアムによる連携事業（ミュージアムカフェ・トーク）実績

回数	年度	開催日	場所	タイプ	タイトル	話し手	所属等
1		H26.1.25	プティクリフ	カフェ	月のはなしアレコレ	中村彰正	久万高原天体観測館（学芸員）
2	月を愛でる文化				神内有理	町立久万美術館（学芸員）	
3	H25	H26.2.15	プティクリフ	カフェ	博物学ってなに？～江戸の図鑑、植物図譜の世界～	神内有理	町立久万美術館（学芸員）
4					博物学ってなに？～生物を集めて分けてわかること～	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）
5		H26.3.8	プティクリフ	カフェ	温故知新 天体ショーを振り返る	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）
6	石鎚の自然と両生類				岡山健仁	面河山岳博物館（学芸員）	
7		H26.12.6	道の駅天空の郷さんさん	レストラン	超新星と明月記～古文書に記された星たち～	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）
8	かくれ里と山椒魚～久万高原の孤独な森の住人～				岡山健仁	面河山岳博物館（学芸員）	
9	H26	H27.1.17	町立久万美術館	博物館	星座のなりたち～東西文化融合のたまもの～	中村彰正	久万高原天体観測館（学芸員）
10					千手観音のはなし～仏像に近づいてみよう～	神野祐太	町立久万美術館（学芸員）
11					H27.2.14	道の駅天空の郷さんさん	レストラン
12		H27.3.14	道の駅天空の郷さんさん	レストラン	ダイヤの窓から見える地球や惑星の深部	平井寿子	愛媛大学地球深部ダイナミクス研究センター（特命教授）
13	虫をくう話～愛媛の昆虫食について～				矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）	
14		H27.12.12	道の駅天空の郷さんさん	レストラン	じっと手のホネを見る～ホネを比べて分かること～	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）
15	遺跡で見つかるホネの話～上黒岩を中心に～				遠部 慎	上黒岩考古館（学芸員）	
16	H27	H28.1.16	道の駅天空の郷さんさん	レストラン	生活の中の陶磁器デザインと初春の調べ	工藤省治	陶磁器研究工房「春秋窯」（陶芸家）
17					大野千佳	コピーライター	
18					町田 光	箏奏者	
19		H28.2.13	蔵お茂ご	酒蔵	星の名付け親になる～小惑星の発見と命名～	中村彰正	久万高原天体観測館（学芸員）
20	石鎚山の高山性植物～10年間の山行で出会った花たち～				岡山健仁	面河山岳博物館（学芸員）	
21		H28.3.12	町立久万美術館	博物館	見ちゃいました！ブラックホール？	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）
22	アートと科学-遠近法という接点				神内有理	町立久万美術館（学芸員）	
23		H28.12.10	まちなか交流館	観光施設	ビーナスの素顔～ユニークな惑星、金星の正体に迫る！	中村彰正	久万高原天体観測館（学芸員）
24	ビーナスの素顔～石偶から土偶へ～				遠部 慎	上黒岩考古館（学芸員）	
25	H28	H29.1.14	まちなか交流館	観光施設	あぶない天体？ブラックホールのABC～入門編～	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）
26					身近なあぶない生き物	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）
27					H29.2.12	道の駅天空の郷さんさん	レストラン
28		H29.3.11	町立久万美術館	博物館	久万美30年	高木貞重	町立久万美術館（館長）
29	しゅっく！なっく！石鎚山系自然学入門				岡山健仁	面河山岳博物館（学芸員）	
30		H29.12.9	まちなか交流館	観光施設	アートを見る目～具体美術協会にまつわる色んな目～	中島小巻	町立久万美術館（学芸員）
31	星を見る目～目を知ると見えてくる星の世界～				中村彰正	久万高原天体観測館（学芸員）	
32	H30.1.13	道の駅天空の郷さんさん	レストラン	宙（そら）の上に蛇が歩いています！～冬の宙に白い龍をさがせ！～	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）	
33				山の上に魚が歩いています！～ドジで？のろまな？山椒魚の話～	岡山健仁	面河山岳博物館（学芸員）	
34	H29	H30.2.17	道の駅天空の郷さんさん	レストラン	巨大昆虫・微小昆虫～実は大きくなれない昆虫たち～	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）
35					遺跡で見つかる大きい世界・小さい世界	遠部 慎	上黒岩考古館（学芸員）
36		H30.3.17	町立久万美術館	博物館		石丸耕一	坂の上の雲ミュージアム（学芸員）
37	子規俳句にみる自然と美術				中村彰正	久万高原天体観測館（学芸員）	
38					矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）	

小規模自治体の自然史、天文、美術系ミュージアム連携事業（面河山岳博物館）, 参考資料

39	H30.12.15	道の駅天空の郷さんさん	レストラン	隕石～宇宙からの貴重な贈り物	岡山健仁	面河山岳博物館（学芸員）	
40				石は語るよ、どこまでも～石鎚山の石と動植物の関係	中村彰正	久万高原天体観測館（学芸員）	
41	H31.1.19	町立久万美術館	博物館	石・石偶・洞穴	遠部 慎	上黒岩考古館（学芸員）	
42				H30	田中坦三と石彫刻	本田李璃子	町立久万美術館（学芸員）
43	H31.2.16	道の駅天空の郷さんさん	レストラン	みんな大好物！久万高原の鉱物の話	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）	
44				とべ動物園の石事情！？～石の動物、エサの石、病気の石～	前田洋一	愛媛県立とべ動物園（副園長）	
45	H31.3.16	町立久万美術館	博物館	砥部焼の石にまつわる話	中島小巻	町立久万美術館（学芸員）	
46				超新星からの贈り物・星で作られる石の元素	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）	
47	R1.12.8	町立久万美術館	博物館	奇妙な彫刻～抽象彫刻のすすめ～	本田李璃子	町立久万美術館（学芸員）	
48				昆虫おじさんが語る「彫刻とデッサン展」	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）	
49	R2.1.12	町立久万美術館	博物館	石の時代から鉄の時代へ	遠部 慎	上黒岩考古館（学芸員）	
50				R1	彫刻家と鉄	中島小巻	町立久万美術館（学芸員）
51	R2.2.22	道の駅天空の郷さんさん	レストラン	あなたの知らない北斗七星～死兆星は実在する！～	中村彰正	久万高原天体観測館（学芸員）	
52				石鎚信仰と北斗室性～なぜ星に祈るのか？～	山路稜子	面河山岳博物館（地域おこし協力隊）	
53	R2.2.23	町立久万美術館	博物館	ブラックホールは本当に見えたのか？	三好 真	国立天文台	
54				ブラックホールはどんなもの？	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）	
55	R3.1.16	町立久万美術館	博物館	星の名前あれこれ～ペテルギウスの本当の名前は？～	中村彰正	久万高原天体観測館（学芸員）	
56				作品名の秘密	本田李璃子	町立久万美術館（学芸員）	
57	R2	R3.2.13	町立久万美術館	博物館	芸術家のもう一つの顔～余技と呼ぶにはもったいない～	中島小巻	町立久万美術館（学芸員）
58					生き物たちの意外な素顔～久万美収蔵資料にみる蟲～	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）
59	R3.3.13	町立久万美術館	博物館	宙ガールの観測会に参加しよう！～女性のための天体写真教室～	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）	
60				学芸員の見つけた久万美まわりのおもしろ生物	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）	
61	R4.1.29	町立久万美術館	博物館	久万高原 生き物新発見・大発見の裏側	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）	
62				絵には裏がある！～裏側にまつわる裏話～	中島小巻	町立久万美術館（学芸員）	
63	R3	R4.2.26	オンライン	久万高原の神社とご神木	山路稜子	面河山岳博物館（地域おこし協力隊）	
64				プラネタリウムの舞台裏	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）	
65	R4.3.26	オンライン	久万高原と重松鶴之助-その①	博物館の建物にやってきた珍種・希少種	中島小巻	町立久万美術館（学芸員）	
66				天文台と望遠鏡の秘密	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）	
67	R4.3.26	オンライン	久万高原と重松鶴之助-その②	重藤遼太郎	久万高原天体観測館（学芸員）		
68				本田李璃子	町立久万美術館（学芸員）		
69	R5.1.21	オンライン	作家の年齢別にみる早生と老熟①-早生	中島小巻	町立久万美術館（学芸員）		
70				虫だけじゃない！脱皮する生き物のはなし	安田昂平	面河山岳博物館（学芸員）	
71	R4	R5.2.19	オンライン	作家の年齢別にみる早生と老熟②-老熟	本田李璃子	町立久万美術館（学芸員）	
72				星の死とコンピューターの進化	藤田康英	久万高原天体観測館（学芸員）	
73	R4.1.29	オンライン	星の年齢と最期	重藤遼太郎	久万高原天体観測館（学芸員）		
74				カメムシの子育て～子を守る、子に伝える～	矢野真志	面河山岳博物館（学芸員）	

※平成26年（2014年）～令和4年（2022年）までの11年間で74題のトークを実施